

予測結果

a . 二酸化窒素

施設の供用により発生する排出ガスによる、周辺地域における窒素酸化物（NO_x）の寄与濃度（年平均値）は図 5-2-8 に示すとおりである。また、最大着地濃度地点における窒素酸化物（NO_x）及び二酸化窒素（NO₂）の予測結果は、表 5-2-15 に示すとおりである。

施設の供用による窒素酸化物（NO_x）の寄与濃度の最大着地濃度地点は事業計画地内となり、最大着地濃度は 0.00323ppm となると予測される。

また、二酸化窒素（NO₂）の日平均値の年間 98% 値は、最大で 0.046ppm となると予測される。

表 5-2-15 施設の供用により発生する排出ガスの予測結果
（二酸化窒素：年平均値）

予測時期	予測対象	窒素酸化物（NO _x ）年平均値			二酸化窒素（NO ₂ ）	
		寄与濃度の最大着地濃度（ppm）	バックグラウンド濃度（ppm）	環境濃度（ppm） (= +)	年平均値（ppm）	日平均値の年間98%値（ppm）
施設供用時	事業計画地及び周辺地域	0.00323	0.030	0.03323	0.0239	0.046

注：1. 寄与濃度の最大着地濃度は、着地濃度が最大となる事業計画地内における濃度である。
2. バックグラウンド濃度は旧済美小学校局の平成 19 年度年平均値とした。

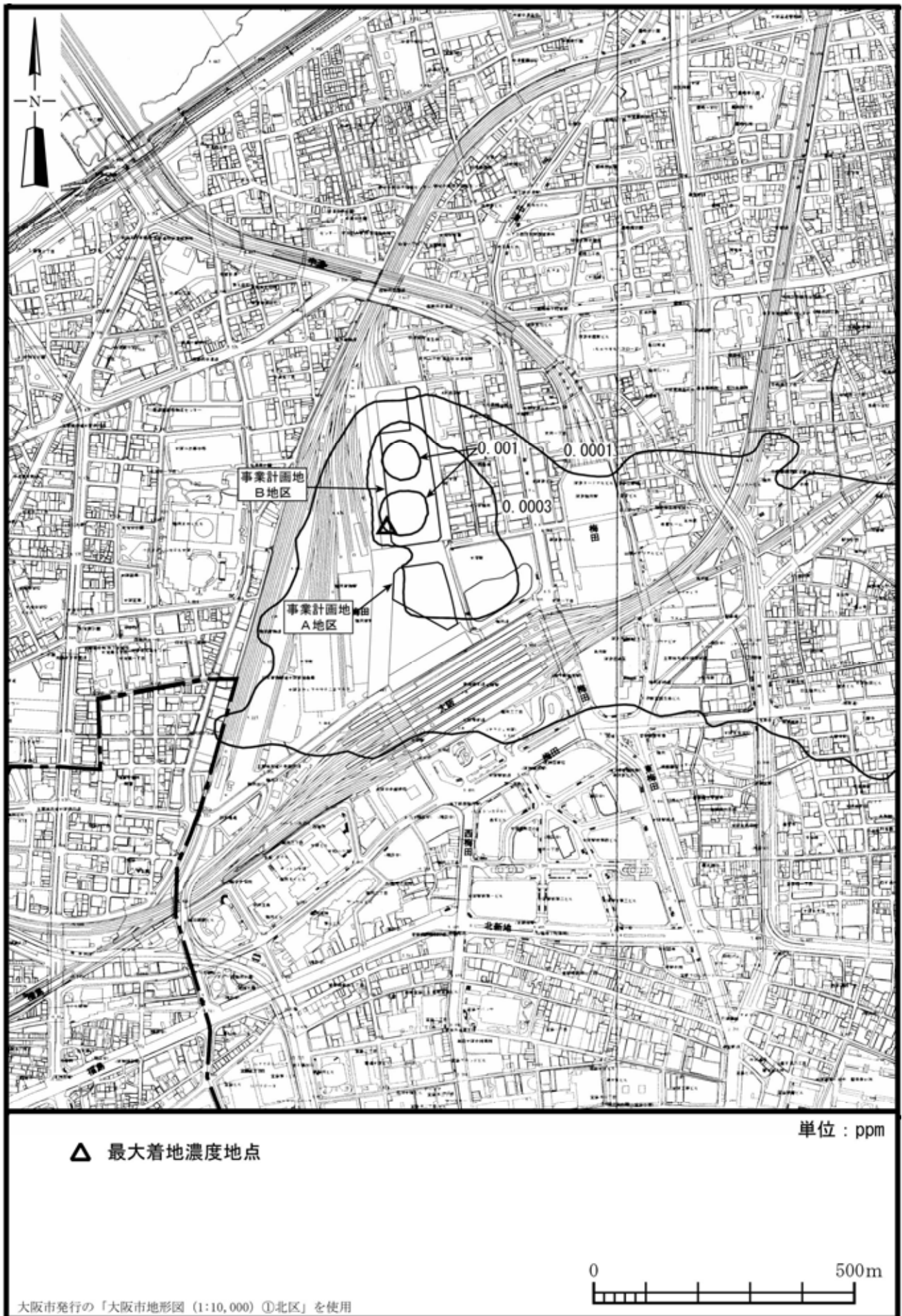


図 5-2-8 施設供用時の窒素酸化物寄与濃度（年平均値）

b . 浮遊粒子状物質

施設の供用により発生する排出ガスによる、周辺地域における浮遊粒子状物質（SPM）の寄与濃度（年平均値）は図 5-2-9 に示すとおりである。また、最大着地濃度地点における浮遊粒子状物質（SPM）の予測結果は表 5-2-16 に示すとおりである。

施設の供用による浮遊粒子状物質（SPM）の寄与濃度の最大着地濃度地点は事業計画地内となり、最大着地濃度は $0.00012\text{mg}/\text{m}^3$ となると予測される。

また、浮遊粒子状物質（SPM）の日平均値の 2% 除外値は、最大で $0.069\text{mg}/\text{m}^3$ となると予測される。

表 5-2-16 施設の供用により発生する排出ガスの予測結果
（浮遊粒子状物質：年平均値）

予測時期	予測対象	浮遊粒子状物質（SPM）年平均値			日平均値の 2%除外値 (mg/m^3)
		寄与濃度の 最大着地濃度 (mg/m^3)	バック グラウンド 濃度 (mg/m^3)	環境濃度 (mg/m^3) (= +)	
施設 供用時	事業計画地 及び 周辺地域	0.00012	0.031	0.03112	0.069

注：1. 寄与濃度の最大着地濃度は、着地濃度が最大となる事業計画地内における濃度である。
2. バックグラウンド濃度は旧済美小学校局の平成 19 年度年平均値とした。

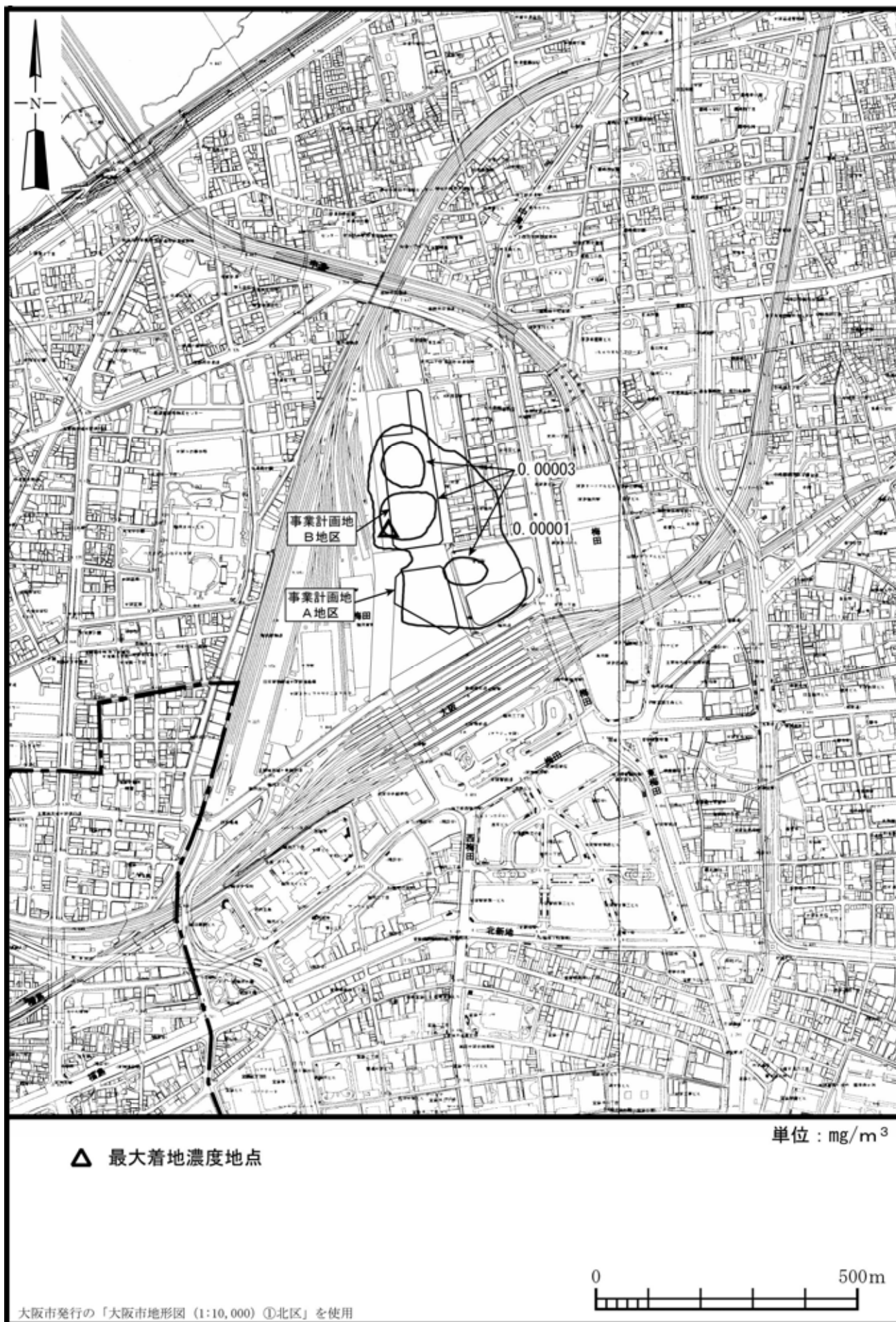


図 5-2-9 施設供用時の浮遊粒子状物質寄与濃度（年平均値）

評価

a．環境保全目標

大気質についての環境保全目標は、「環境への影響を最小限にとどめるよう、環境保全について配慮されていること」、「環境基本法に定められた環境基準の達成と維持に支障がないこと」、「大気汚染防止法、大阪府生活環境の保全等に関する条例に定められた排出基準、総量規制基準、規制基準等に適合すること」、「大阪市環境基本計画、大阪市自動車交通環境計画の目標、方針の達成と維持に支障がないこと」とし、本事業の実施が事業計画地周辺の大気質に及ぼす影響について、予測結果を環境保全目標に照らして評価した。

b．評価結果

空調設備等については、極力、排気を屋上など高い位置から行う計画とし、周辺環境への影響をできる限り軽減する計画である。

施設供用時に発生する排出ガスの予測結果は、表 5-2-17、18 に示すとおりであり、いずれの項目についても、寄与濃度はバックグラウンド濃度に比べて小さく、環境濃度は環境基準値を下回ると予測された。

また、低 NOx 型の熱源機器の採用など、設備機器からの大気汚染物質の排出抑制のための対策を検討するとともに、事業計画地周辺の企業や関係諸機関等と連携した梅田エリア全体による公共交通機関の利用促進への取り組みや、施設で使用するサービス関連車両についての低公害型（低燃費、低排ガス）車両の導入など、施設関係車両からの大気汚染物質排出量の抑制のための取り組みについても検討する計画である。

以上のことから、周辺環境への影響を最小限にとどめるよう環境保全について配慮されていること、事業による影響は、環境基準の達成と維持に支障がないことから、環境保全目標を満足するものと評価する。

表 5-2-17 施設の供用により発生する排出ガスの予測結果と

環境基準値との比較（二酸化窒素）

予測時期	窒素酸化物（NO _x ）年平均値			二酸化窒素（NO ₂ ）		環境基準値
	寄与濃度の最大着地濃度（ppm）	バックグラウンド濃度（ppm）	環境濃度（ppm） （= + ）	年平均値（ppm）	日平均値の年間98%値（ppm）	
施設供用時	0.00323	0.030	0.03323	0.0239	0.046	1時間値の日平均値が0.04～0.06 ppmのゾーン内またはそれ以下であること

注：1.寄与濃度の最大着地濃度は、着地濃度が最大となる事業計画地内における濃度である。
2.バックグラウンド濃度は旧済美小学校局の平成19年度年平均値とした。

表 5-2-18 施設の供用により発生する排出ガスの予測結果と

環境基準値との比較（浮遊粒子状物質）

予測時期	浮遊粒子状物質（SPM）年平均値			日平均値の2%除外値（mg/m ³ ）	環境基準値
	寄与濃度の最大着地濃度（mg/m ³ ）	バックグラウンド濃度（mg/m ³ ）	環境濃度（mg/m ³ ） （= + ）		
施設供用時	0.00012	0.031	0.03112	0.069	1時間値の日平均値が0.10 mg/m ³ 以下であること

注：1.寄与濃度の最大着地濃度は、着地濃度が最大となる事業計画地内における濃度である。
2.バックグラウンド濃度は旧済美小学校局の平成19年度年平均値とした。